随　想

海べの鳴く虫

日浦　勇

9月の20・21日と，なかまの車で和歌山市から泉南の海ぞいを直翅類をさがしてまわった。バッタ・キリギリス・コオロギのたぐいには，亜熱帯から暖帯南部型の分布をするものが多い。このあたりが北限の棲息地となる種類がかなりあると思われるからである。

加太深山（かだみやま）のちょっとした谷筋には，夜になるとイヌビワやウメの葉の上におびただしいヒメクダマキモドキが姿を見せ，ふりしきる雨の中を手に手に懐中電灯をもって集った7人の虫きちがいたちをいたく満足させた。今のところ，ここが本州の最北の産地である。ところが大阪府に入ると，この虫がいそうな気配がしない。谷はほこりっぽい。乾きすぎている。クチキコオロギも同様で，深山（みやま）の日吉神社のウバメガシには，枯れた樹皮を二三枚もめくれば見つかるのに，大阪府の天然記念物に指定されている小島のウバメガシ林では，台所の害虫クロゴキブリがとびだしてきただけだった。

二里ケ浜もゴミの原だ。聞きなれぬ透明な鳴声の主を求めてポリ袋や発泡スチロールの山をかきわけていると，防波堤の上から土地の婆さんが汚いから止めろと忠告してくれた。でも，クマスズムシやイソカネタタキがゴミの間からみつかった。このイソカネタタキは岬町豊国崎まで見られた。

大阪湾岸を北上するにつれて，気温はおそらく下がり，乾燥の度はおそらく増すのだろう。和歌山にくらべて大阪府に入ると途端にあれこれの南方系直翅類が姿を消すのは，そうした自然的条件の傾斜が原因なのだろうか。それとも人間による汚染や破壊のひどさが原因なのか。分布調査の折，いつも出くわす問題にこの日も出あったことであった。

新　刊　紹　介

失われゆく大地—地球に迫る生態学的危機—

E.P.エックホルム（Eckholm），石 弘之・水野憲一訳　　蒼樹書房　　pp.274

無限の有機物（食糧生産）を保障する大洋を含めた大地が，森林破壊，過剰放牧，砂漠の拡大，土壌の侵食，かんがい施設への土砂の堆積，魚類の乱獲などによって，破壊されている事実を，世界各国の事例を示しながら解説したもの。食糧危機からの環境破壊へのとりくみで，環境問題がともすれば先進工業国における化学物質の乱用による大気・水の汚染とされているが，それらにくらべて，発展途上国で広がりつづける砂漠，不毛化する大地，増大する洪水，土壌侵食といった環境の破壊の方が，ずっとさし迫った大きな問題である。アフリカやインドの自然が敗走している現実にくらべれば，東京のスモッグ退治など，ほんの小ぜりあいであるとさえ述べている。そんな単純な比較はできないのであろうが，グローバルな見方からすれば，やはり，この食糧危機，その裏にある自然環境の変化は直視しなければならないようである。

著者のE．P．エックホルム氏は現在，ワールドウォッチ研究所員。1949年生まれという若さであるが，1972年，ストックホルムで開かれた国連人間環境会議に提出された報告書など，多くの論文・データー（参考文献が約600つけられている）に基づいて書かれたものだけに説得力がある。

副題が「地球に迫る生態学的危機」とされているが，これは元の「環境破壊と世界の食糧の見通し」の方が，やはり内容をよく表わしていよう。生態学的危機という言葉が，少し浮いているような感じがする。（渡辺弘之）

自然保護教育のこころみ—野外研20年の足跡—

東京教育大学野外研究同好会

自費出版　　pp.223

昭和32年に結成され，今では伝説のようになっている東京教育大学野外研究同好会（通称野外研）の活動の記録である。同会は，東京教育大の廃校にともなって昭和53年3月で解散となった。野外研は結成の目的として自然の観察・研究・保護と啓蒙活動をあげ，多彩な活動をくりひろげ，大町山岳博物館と共に「山の自然科学教室」（昭和32年～昭和40年），東京都高尾自然科学博物

館と共に「高尾自然教室」（昭和42年～50年，32回）を行ない，多くの小中学生を育てた。現在，日本の自然保護運動の中心となっている若手の人達の中には，野外研出身の人達が多くおられる。

この本では，野外研の会誌「短報」，「たんぽう」に掲載された文章を中心として，20年間の活動の中で野外研のメンバーが何を考えてきたかを克明に綴ってある。自然保護とは何か，自然観察をどうすすめてゆけばいいのか，その時々の会員の生の声が感じられ，野外研の歩みは，日本の自然保護運動の歩みと言っても良いように思う。現在，議論されている種々の問題が10数年前に議論されており，また各地で行われている自然観察会が，この野外研の活動をほとんど越える事ができていないというのは，なんとも残念なことであり，それだけにこの本から学ぶところは大きい。

ただ，この本では活動の具体的な内容や方法には，あまりふれられていない。本の性格上，しかたのない事であろうが，その点を最も知りたいと思うのは，評者だけではあるまい。特に高尾自然教室の解散の際の自然観察の方法をめぐっての議論は，現在，最も問題となっている点である。

非売品であるが，希望のある場合は実費（5000円と送料）で分けてもらえる。連絡先，東京都港区白金台5丁目21番1号　矢野亮方　　（布谷知夫）

続・自然保護を考える

信州大学教養部　自然保護講座編

共立出版　　pp.364

生物学をはじめ，経済学，法学，文学，哲学など専門分野を異にする16名による共同執筆にもかかわらず，それを感じさせないのは「およそ自然保護は人類永遠の課題である」（まえがき）と位置づけ，8年間にわたって営々と自然保護講座を支え，充実させてきた信州大学のスタッフたちのあいだに培われた共通の問題意識によるものであろうか。窒素酸化物の環境基準緩和にその典型が見られる「開発」サイドの巻き返しや，自然保護運動自体が複雑な状況に直面していると言われる中で，執筆者たちは，このように自然保護を人類の未来を左右する課題として受けとめ，飽くことなき思索と探究を続けている。

この続編では，まえがきにあるように，「できるだけ身近な具体的な事象」をとりあげ，それを出発点として自然保護を考えていく，という編集方針を採用したそうで，これによって正編のやや教科書的な構成・内容とは好対照をなすことになった。しかも，内容においては門外漢が読んでも決して難かしくないように充分な配慮がなされている。また，正面きって自然保護問題をとりあげた大論文，といったものは含まれていない代わりに，各章の随所において執筆者の自然観，自然保護論などが散りばめられていてたいへん興味深い。それゆえ，全体としては自然保護についてのユニークな入門書かつ問題提起の書となっているのである。

18編の論文および「談話室」と名づけられた雑談風の読みもの3編とが3部にまとめられた構成となっている。社会科学的なものが第1部，自然科学的なものが第2部，そして第3部には人文科学的なものという配列であるが，読者は興味に応じてどこから読み始めても良いようになっている。

第1部では先ず長野県での実例にもとづいて観光開発，農業問題がとりあげられ，過疎に便乗して進出した観光開発が残した無残な爪あとや，農民が予想以上に農業から離れてしまっている現状を私たちに教えてくれる。さらに，環境権や環境アセスメントについての章では，環境科学や法学の立場からの現在の到達点や今後に残された検討課題が明快に述べられている。

第2部では，最初に全国の原生林の実情が明らかにされ，危機にさらされているこれらに対する視点の転換が訴えられる。さらにカモシカ，イワナなどがとりあげられ，自然破壊が進む中での動物個体群の影響が具体的に述べられる。後半の3章では，し尿，下水，廃棄物の処理方法の現状に対する痛烈な批判とともに，未来の再利用システムへの夢が生き生きと語られる。我々がこれらを単なる夢に終わらせることは許されないであろう。

第3部は人間自身を対象とした，自然観，自然認識の問題が中心テーマである。「独特」だと言われる日本人の自然観を，ある者は万葉時代にまで逆のぼって歴史的に，またある者は外国人の精神構造との比較において論じている。いずれにしても現在に到るまでの国土の破壊を許してしまった日本人の自然観については，問題とされるべき点が少なくないはずである。

最後に参考資料として掲げられた「自然保護年表」および「自然保護関係主要出版目録」が，正編のものとともに，きわめて利用価値の高いものであることを付け加えておこう。　　（山西良平）